

2023. 3. 26. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書 19 章 1～10 節
『失われたものとは何か』

ルカ固有の記事が連続します。先週学びました 18 章 35～43 節の「目の不自由な人」、そして本日 19 章 1～10 節の「ザアカイ」、さらに来週の 11～27 節の「ムナ」のたとえ話が記されます。

実はこれら三つは初代教会のテーマであったとルカはオリジナルの記事を加筆してまで描き出そうとしたのです。それはルカ自身、つまり初代教会が誰を(何を)福音の対象とするのかという自問自答の結果としての最終的な選びでもあったのです。それは以下の三つに分類出来ます。

- ①「目の不自由な人」= 病い・障がい・貧しい人々
- ②「ザアカイ」= 不当な差別を受ける 人々
- ③「ムナ」= 財産と救いとの問題・富の持ち方

この三つの環境に生きる人々と共に寄り添うために、「わたしには何が失われているのか」という問いを自らに向けて発信したのです。そのため、誰にでも理解出来るザアカイの話をしたためたのです。

本日の箇所では最初にエリコという舞台設定から始まります。このエリコという町は当時、交通の要衝としてたいへんな賑わいを見せた町でした。統治者であるローマは、このような町には必ず関税所を設けておりました。そこには徴税人と呼ばれる関税徴収を行う委託業者を設置致しました。実際には徴税人などという職種はそれほど恵まれた収入があったわけではありません。ただ、ユダヤの人々から見ると、ローマの手先になってさやかせぎする悪徳な輩として蔑まれたということです。おそらくやっかみや妬み半分といったところが実情だったのでしょう。

ザアカイは徴税人の頭領であったといえます。しかし、人より優位を誇り、人を見下げるような態度をとることもなく、ひとりで木に登ります。いっばしの大人が木登りするなどということはまずありませんでした。いわばルカの描く「破れ」なのでしょう。先週の説教で、目の不自由な人がまわりの制止を振り切ってま

で大声で救いの要請を繰り返したという「恥」と同じ手法です。おそらく、初代教会に参加した人々には多かれ少なかれ、このような日常性を自らをもって叩き破るという体験が共通項として存在していたのかと思います。その結果としてイエスとの出会い、つまりは自分が「失っていたもの」とは何だったのかを、文字通り手探りで探し当てて行ったのではなかったでしょうか。

わたしたちは人生の意味を問います。答えもその時々に応じて何とか見出てきたようにも思ってしまう。しかし、そのいずれにも満足を得てきたわけではありません。問うには問うが、いつも答えが用意されていたわけでもないのです。答えのないままとにかく生きてきたのです。しかし、それで良いのです。それは人生が答えで生きるものではなく、問いで生きるものであることを教えているのです。

ザアカイはイエスと出会います。その途端、彼の長年にわたる人生への疑問は氷解したのです。多くの人々の中で、このザアカイだけが「失われたもの」を自分の人生の内に見出したのです。それは8節に描き出されるように「施しと返し」でした。自分を冷遇し蔑む者たちへの報復や孤立ではなかったのです。これが福音なのです。